

小林榮子校訂

修訂
近松世話淨瑠璃集成

東京 大同館書店版

昭和二十三年十二月二十日印刷
昭和二十三年十二月二十五日發行

〔日本出版協會會員番號A二〇四〇〇三〕

近松世話淨瑠璃集成

正 價 金三百九拾圓

著 者

小 林 榮 子

發 行 者

阪 本 眞 三

印 刷 者

小 坂 孟

印 刷 所

大日本印刷株式會社

東京都新宿區市谷加賀町一丁目十二番地

東京都千代田區神田一ツ橋貳丁目三番地

東京都新宿區市谷加賀町一丁目十二番地

發 行 所

東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三
振替貯金口座東京八七貳番
電話九段一〇七

配 給 元

東京都千代田區神田淡路町二ノ九

大 同 館 書 店

日本出版配給株式會社

例言

一、近松門左衛門の作にかゝる世話淨瑠璃は、元祿十三年正月六日初興行の『長町女腹切』にはじまり、享保七年四月廿二日初興行の『心中宵庚申』に至るまで、凡て二十四篇あり。本書は其の全部を収録せるものなり。

一、近松の淨瑠璃は盡く竹本座の爲に書下されしものにて、何れも太夫の聲を借り、人形を動かして看る人の喝采を博せしものなれど、單に之を読み物として視るも不朽の價値あること人の普く知る所なり。本書は全く之を読み物として世に傳へんことを旨として編成したり。

一、されば読み易く解し易からんことを主とし、假名多き原本を改めて成るべく多く漢字を充當し、また故事出典等をも調べて、それ々に適當する文字を充つるに注意したり。尙又かなづかひの如きも、必ずしも原本に従はず、一般の用例に依る事としたり。

一、紀海音の作にかゝる『心中二ッ腹帯』は『心中宵庚申』と同じ事實を材料とし、而も同時に興行して競争を試みしものにて、併せ讀むに極めて趣味深さを以て、これを特に巻尾に附載したり。

- 一、本書に續きて時代淨瑠璃中の傑出せるものを選び、本書と同じき體裁により世に公にせんとて、今正にその準備中なり。遠からずして江湖の叱正を乞ふに至るべしと信ず。
- 一、本書刊行前、世間に多く近松淨瑠璃の刊本あり。それらに校訂者の注意努力の認むべきもの少からず。本書編成につき其等諸書より益を得る所多かりしは感謝に堪へざる所なり。本書また不完全の點少からざるべし、江湖の指導により、版を重ねると共に改訂を加へ行くことを怠らず、漸次完全に近からしめんを期す。

校訂者記

目次

【初興行年月】 【作者年齢】

頁

□長町女腹切

元祿十三年庚辰正月—(四十八歳)……………五七

□淀鯉出世瀧徳

同 年(月未詳)—(四十八歳)……………八二

□曾根崎心中

元祿十六年癸未五月—(五十一歳)……………一〇九

□源吾兵衛薩摩歌

元祿十七年甲申正月—(五十二歳)……………一二五

□心中重井筒

寶永元年四月—(五十二歳)……………一六五

□心中二枚繪草紙

寶永三年丙戌三月—(五十四歳)……………一八七

□戀八卦柱曆

同 年 九 月—(五十四歳)……………二〇七

□堀川波の鼓

寶永四年丁亥二月—(五十五歳)……………二三七

□興兵衛卯月の紅葉

同 年 四 月—(五十五歳)……………二六一

□ 心 あとおひつ 中卯月の潤色 いろあけ

□ 伊達 だて 染手綱 ぞめたづな

□ 衆之助心 おひめしん 中萬年草 ちうまんねんぐさ

□ 清十郎 おなつとじふ 五十年忌歌念佛 うたねんぶつ

□ 次郎兵衛 しま 今宮心中 みやしんちう

□ 心中 しんちう 双は水の朔日 ふたはみづのついで

□ 夕霧 ゆふきり 阿波鳴渡 あはなると

□ 忠兵衛 ちゆうべい 冥土の飛脚 めいどひやく

□ 嘉平治 かへいぢ 生玉心中 なまぎんちう

□ 鎗權 やりのけん 三重帷子 さんかすねかたびら

□ 山崎與次兵衛 やまざきよじべい 壽門松 ねびきのかどまつ

同年六月—(五十五歳)……………二八一

同年六月—(九十五歳)……………二九九

寶永五年戊子四月—(五十六歳)……………三三二

寶永六年巳丑正月—(五十七歳)……………三五五

寶永七年庚寅正月—(五十八歳)……………三八一

同年六月—(五十八歳)……………四〇六

同年七月—(五十八歳)……………四三五

寶永八年辛卯三月—(五十九歳)……………四五九

正徳五年乙未八月—(六十三歳)……………四八五

享保二年丁酉八月—(六十五歳)……………五一六

享保三年戊戌正月—(六十六歳)……………五四八

□博多小女郎浪枕

同年十一月—(六十六歳)……………五七六

□紙屋治兵衛心中天網島

享保五年_{庚子}三月—(六十八歳)……………六〇三

□女殺油地獄

同年七月—(六十八歳)……………六三一

□心中宵庚申

享保七年_{壬寅}四月—(七十歳)……………六六七

□心中二腹帯

《紀海音作》……………七〇七

近松世話淨瑠璃集成

近松門左衛門と其の時代

小林 一郎

近松門左衛門が逝いてより今や、貳百有餘年になる。此の間に多くの作者が世に出て其人其人の時代を作つたが、近松の光は群星の中の北斗の如くに、いつも他の多くの者を壓して輝いて居た。今後時勢が如何に變じやうとも、日本語が日本語として存在する間は、近松の作がその光を失ふことはあるまいと思ふ。

斯程に偉大な作家ではあるが、近松の事蹟はあまり明でない。今まで沉く世に知られた所によると、近松は長門萩の人で、その生れたのは承應二年癸巳であつた。即ち徳川四代の將軍家綱の時で、由井正雪の騷動のあつた翌々年である。相國寺の宗長老はその兄で、岡本一抱子といふ名醫はその弟である。姓は杉森、名を信盛といひ、平馬といふのが通稱

であつた。年の若い時に肥前唐津の近松寺に入つて僧となつたが、後に京へ上つて還俗した。

唐津の近松寺に今でも近松の墓といふものがあるが、是は後に作つたものであらう。近松の遺骸を葬つたのは大坂寺町の法妙寺で、今もこゝに墓がある。近松寺は禪宗で、法妙寺は日蓮宗である。久々智村の廣濟寺にも法妙寺のと同じ墓がある。

京都では最初弟の家に寄寓し、尋いで一條家に仕へて侍となつた。しかし久しからずして官を辭して自ら近松門左衛門と名乗り、歌舞伎芝居都萬太夫座の作者となつた。これは延寶五年、即ちその二十五歳の時である。其の作は世間の人氣に投じ、近松の名大に著はるるに至つたので、宇治加賀椽や井上播磨椽の求めに應じて數種の淨瑠璃を作つた。しかし此頃の作は従前世に行はれて居た淨瑠璃の風を摸倣したもので、近松の特色を充分に發揮したものとは云はれぬのである。

然るに貞享三年二月に至り、竹本義太夫の爲に依つた『出世景清』は淨瑠璃界に新なる天地を開いたもので、眞に『近松の作』として視るべきものは此より以後である。これは近松の三十四歳の時である。されば此よりして享保九年正月、七十二歳で作つた『關八州繫馬』までの百數十種が近松の淨瑠璃として取扱はるべきもので、此の中世話物は二十四種、そ

の他は盡く時代物である。而して近松は此の享保九年に没したのであるから『關八州繫馬』がその絶筆となる。即ち總計三十八年間の勞作が今近松の淨瑠璃として吾々に遺されてゐるのである。

竹本義太夫は大坂で操り人形の座を主管してゐた。その座は竹本座といひ、豊竹座と相對峙して互に勢力を競うて居たのである。近松は此の義太夫の請によつて京都から大坂へ移つて、竹本座の座附の淨瑠璃作者となり、名聲は愈々高くなつた。此時豊竹座では紀海音が作者であつて、近松と相對峙して居た。海音も却々の上手ではあつたが、近松と肩を比べることは出來ず、その作つた淨瑠璃の數も近松よりは遙かに少い。

海音は大坂の人で、近松よりは九年後れて寛文二年に生れた。若い頃は太和の柿本寺に入て僧となつたが、後還俗して淨瑠璃作者となつた。その作は元祿十二年八月、三十八歳で作つた『傾城懷子』に始まり、凡て四十餘種ある。近松の死よりも二十三年後れて、享保二年十月八十一歳で没した。

しかし兎も角も豊竹座といふものが竹本座と相拮抗して居られたのは、海音の力といはなければならぬ。海音の作の『心中二つ腹帯』は近松の『心中宵羹申』と同じ事實を仕組んで同時に興行したのであるが、此時は竹本座を見事に負かしてしまつたのである。

近松の作でも盡く世間の喝采を博したといふわけでは無いが、大體に於ては非常に持て囃されて、得意の生涯を送つたものと思はれる。『作者の氏神』とか『人中の龍』とかいふ稱讃を加へられたのも、その没後あまり久しい事ではない。其の没年たる享保九年は八代將軍吉宗の時で、英一蝶の死んだのと同年である。されば華奢を極めた五代將軍綱吉の時代が、近松の最も盛に活動した時と見てよいのである。即ち其の作は世間で汎くいふ『元祿時代』の產物と云つても不可ではない。今その時代に文學美術の方面で有力であつた二三の人々と近松との年代關係を調べて見ると、

○近松の生れたる承應二年には○林羅山七十一歳○山鹿素行三十二歳○伊藤仁齋二十七歳○貝原益軒二十四歳○僧契冲十五歳○西山宗因四十九歳○狩野探幽五十二歳○土佐光起三十七歳

○出世景清を作りし貞享三年には○仁齋六十歳○益軒五十七歳○新井白石三十歳○室鳩巢二十九歳○荻生徂徠二十二歳○荷田春滿十九歳○井原西鶴四十五歳○松尾芭蕉四十三歳○英一蝶三十四歳○尾形光琳二十九歳

○近松の没したる享保九年には○鳩巢六十七歳○白石六十八歳○徂徠六十歳○石田梅巖四十歳○賀茂眞淵二十八歳○江島屋其蹟五十八歳○紀海音六十三歳○竹田出雲三十四歳

○柳澤淇園十八歳○尾形乾山六十二歳○鳥居清信六十一歳○宮川長春四十三歳○奥村政信三十五歳○千代女二十三歳○與謝蕪村七歳○池大雅二歳

此で以て見ても、其の時代をほゞ想見することは出来やう。此の時代は正に各方面に人才の輩出した時代である。近松は矮人の中に立つて肩を聳やかしたのではない、巨人の群に入つて而も其等を眼の下に見て居たのである。

一體元祿時代の文藝といふものは關東よりも關西の方に其の中心を有して居たので、その覇權の關東へ移つたのは享保以後のことである。政治の中心がやがて文藝の中心となるのは普通の例であるが、それは決して同時では無く、大分後れるものである。江戸は元來武藏野の一部で海に臨んだ寒村であつたのが、徳川氏の幕府を此處に開くに及んで次第に盛になつた。けれども京坂地方で久しく培植立てた文明を盡く奪ひ取るのには、可なりに長い歳月を費さなければならぬ。徳川家康が江戸城に移つたのは天正十八年のことで、此より數へても元祿元年は九十八年後である、若し豊臣氏滅亡の年から數へれば僅に七十三年である。今日と異つて交通の便も碌に開けぬ時代に、如何に徳川氏の勢力が強大であつても、六十年や七十年で西の繁華を盡く東へ奪ひ取ることの出来やう筈は無い。されば所謂元祿時代に在ては學問藝術凡てに於て、西の方が東よりも遙かに優勢であつたのであ

る。然るに此の四代將軍綱吉の在職中に、東の方が優勢となるべき基礎が漸く作られたやうに見える。

綱吉は有名なる大公方である。その下には彼の柳澤吉保が老中として權勢を恣にして居たのである。八代將軍吉宗を明君として、盛に稱讃する人々の間には、綱吉將軍も柳澤も頗る評判が悪い。勿論此の時代に多くの弊害のあつたことは争はれぬが、又一方に非常に稱揚すべき方面のあつたことを考へなければならぬ。放縱といへばそれ迄であるが、此の時代は確に活氣のあつた時代である、快濶な氣分に充ちた時代である。殊に江戸の景氣といふものは目覺しいものであつた。それで西の方から種々の方面の名家が東へ下つて來る機運が此の時に開けて、享保以後は益々盛んになり、やがて文藝の中心が東に移るに至つたのである。京都の仁齋は江戸の徂徠よりも先輩である。大坂の宗因は江戸の芭蕉よりも先輩である。西の益軒は東の白石鳩巢よりも先輩である。光琳も英一蝶も西から下つて江戸へ來た。春満も眞淵も西から江戸へ來た。一中節も西から豊後節も西から來た。江戸から西へ行つて大なる影響を與へたものとしては、當時まだ何も無かつた。要するに元祿時代に於ては西の方の水平線が東の方より高かつた、それが享保の頃から次第に東へ強く流れ來て、天明の頃になつては東の方が遙に高潮になつたものである。

江戸の堺町には早くから操り座があつたとはいふが、それは坂田金平の武勇談などを脚色した至極單純なものであつて、所謂大坂の操り人形に比べることの出来るものでは無かつた。されば近松が關西の文藝界に與へた影響の大きかつたのは勿論であるが、その江戸文藝の發達を促した直接間接の力の甚だ偉大であつたことを認めなければならぬ。但し多くの天才に於て其の例を見るが如く、近松も亦自身の偉大なことを生涯自覺せずして過ぎた様である。其の没するに臨んで書き遺した文を見るに、

代々甲冑の家に生れながら武林を離れ、三槐九卿につかへ咫尺し奉りて寸爵なく、市井に漂ひて商賣しらず、隱に似て隱にあらず、賢に似て賢にあらず、ものしりに似て何もしらず、世のまがひもの、からの大和のをしへあるみちく、伎能雜藝滑稽の類まで、しらぬ事なげに口にまかせ氣にはしらせ、一生轉りくらし、今はの際にいふべく思ふべき眞の一大事は一字半言もなき倒惑ごゝろに、心の耻をおほひて七十あまりの光陰、思へばおぼつかなき我世經畢ぬ、もし辭世はと問ふ人あらば、

それ辭世さるほど扱もそのうちに残る櫻が花し匂はゞ

享保九年中冬上旬

入寂名阿禰院穆矣日一具足居士

不俟終焉豫自記春秋七十二歲

のこれとは思ふもあろかうづみ火のけぬまあだなる朽木がきして
とある。

此文によるも近松は不朽の文字を遺すとか知己を千載に待つかいふ大抱負を以て筆を執つたのでは無く、『のこれとは思ふもあろか』と世の中を軽く思ひすて、洒脱な心で一生を経たことが分る。さりながら其の一生は淨くして汚れの無い一生であつたと思はれる。氣の大きい、心のやさしい、人望のあつた人と思はれる。たとへ茶屋酒に酔ひつづれて前後不覺であつたことは少くなくても、一家の主人としては快濶で鷹揚で、夫婦の中も睦まじかつたやうである。その臨終に先つて過去を回想して見て、多く悔ゆる所無き一生であつたといふ自信は確にあつたであらう。その心持は此の短い一篇の文の中にもよく現はれて居る。『残る櫻が花しにほはゞ』といふは決して冷かな絶望の聲では無い。又蜀山人の『かな世説』の中に次のやうな話が出て居る。

ある時兄の醫師、(弟の傳へ誤りであらう)近松がよしなき浮瑠璃を作る事をいましめし時、そこには和語の藥名の書などをつくりて、一字一畫の誤あれば人の性命にかゝる大事の事なり。我らが作る所は狂言綺語にして人の害にならずといひしかば、兄も其理に服

し、さあらば中直りのため伴ひて大和めぐりせんとて、つれだちてめぐり、世に傳ふる寺小供の手本の龍田詣といふものを書きしと、盧橘庵の物語なり。

此の話も近松が格別大きな抱負をもつて書いたのではないといふことを證據立てると共に、その洒脱な人品の程もよく偲ばれる。其の別號を平安堂といひ、巢林子といひ、又不移山人と云つた。平安堂といふは京都に居たのに因んだので別段の奇も無いが、巢林子といふは莊子の逍遙遊篇に『鵲鵲深林に巢くふも一枝に過ぎず、偃鼠河に飲むも満腹に過ぎず』といふに取つたことは明である。即ち自ら分に安んじ足ることを知るの意を寓したものである。不移の二字は多分論語の中に『上知と下愚とは移らず』とあるのに依つたものであらう。即ち自ら下愚に甘んずるの意を寓した事と思はれる。斯くの如くに自分を卑く視て居て、彼が如き多くの名作を遺したことは、曲亭馬琴がいつも自ら尊大に構へて道學先生のやうな態度を取りながら、随分つまらぬ物を多く書いて居るのと好個の對照ではないか。

彼のシキスピアが自己の大詩人たることを覺知せず、世渡りの爲に戯曲を作つたと同じく、近松も竹本座の繁昌を目的として筆を執つたのである。而も此の二人の作は共に高遠な理想を抱いた大詩人や、深奥なる研究の結果を筆に寫した大文豪の作よりも多くの眞實を有して居る。是れ實に此の二人が希有の天才たる所以である。二人の事蹟が共に明に